

中国のシルク原料事情
実態調査派遣の報告書

北京市～昆明市～杭州市



2011年9月

日本繊維輸入組合

絹委員会

目 次

《はじめに》	2
一、団員名簿	4
二、日程表	5
三、訪問先との意見交換	6
①中国紡織品進出口商会 ②雲南省繭絲綢協会	
③浙江凱喜雅国際股份有限公司（旧浙江省シルク出入公司）	
四、訪問先工場と懇談	10
①雲南新千佛繭絲綢有限公司 ②浙江桐郷春雷絲綢有限公司	
③浙江徳清華絲紡織有限公司	
五、訪問先の面談者名簿	12
六、訪問先・地域の概況	13
①中国紡織品進出口商会の概況 ②浙江省のシルク産業の概況	
③雲南省の一般的な概況	
七、市場調査団員の報告	19
・新美一夫《(株) GSI クレオス》	
・吉岡正博《北西産業(株)》	
・鈴木 誠《西田通商(株)》	
・渡邊 大《同興商事(株)》	
・松村 滋《(株) 松村》	
・潘 林 龍《中和(株)》	
・瀧川晴軌《京都丸紅(株)》	
・佐藤宗一郎《経済産業省 製造産業局 繊維課》	
・芝村 修《日本絹人織織物工業組合連合会》	
・周 萌《浙江凱喜雅国際股份有限公司》	
《あとがき》	30

◆ 資 料

- ①世界の主要繊維の生産量
- ②中国の産地別繭、生糸の生産実績&計画
- ③2011年1～6月真絲綢輸出統計
 - 1) 市場別輸出統計
 - 2) 市・省・自治区別輸出統計
 - 3) 企業別輸出統計

◆ 参 考

- ・中国紡織品進出口商会のHP
- ・中国繭絲綢交易市場のHP

はじめに

2011年初からの中国の対日向け生糸価格は、繭、生糸の相場高騰により、キロ当たり60ドル（21デニール、5A格）越えになっています。今後、益々中国国内の需要増大、さらには人件費、コスト増により生糸の安定価格による継続的な輸入の確保が困難になることが懸念されました。

中国の繭、生糸の生産地は、山東省、江蘇省、浙江省から中西部地区に移転しつつある現状を鑑み、2005年6月に川村委員長の時に山東省、江蘇省、浙江省の主要シルク関連の産地と貿易会社を訪問、2009年10月に宮崎委員長の時には浙江省の杭州市を拠点にして、陝西省、広西チワン族自治区のシルク産地の実態調査と関係会社を訪問されたということでした。

今回は、全体的な中国シルク産業の現状と今後の方向性を把握、理解するために商務部と連携してシルク産業の育成に取り組んでいる中国紡織品進出口商会と浙江凱喜雅国際股份有限公司（旧浙江省シルク輸出入公司）の主要な関係者と、雲南省では中国で新たな繭生産地帯と発展している昆明市の陸良の養蚕、収繭所、検定所、製糸工場を訪問し、シルク原料事情の実態調査及び雲南省商務庁市場運行調節処の協力を得て、雲南省繭絲綢協会の幹部との忌憚のない意見交換を行いました。

日本始め欧米では、コットン、ウール、シルクの天然繊維からレーヨン、アセテートなどの再生、半合成繊維、ポリエステル、ナイロンなどの合成繊維の細番手で伸縮、超軽量、発熱保温、消臭抗菌、UVカットなどの各種機能を持たせた安心・安全な新しい糸、複合素材が開発され市場に出現しています。

しかしながら、本来、中国シルクの最大輸入国であったEU、日本が経済的な立ち直りが進まぬなかでインド、東アジアの旺盛な需要層に支えられて、中国からこれらの国々への輸出が拡大しています。化合成繊維関連の生産による製品類が、インド、東アジアの消費者には、気候、環境条件などで行き届いていないという理由もあるようですが、価格にこだわらず各種商品に加工される天然繊維原料の需要増に支えられて、輸入されているのが実情と考えています。

9月13日（火）から9月17日（土）まで4泊5日で北京市、昆明市、杭州市と大陸の横断的な日程でしたが、当絹委員会が抱えるシルク需要の掘り起こしのテーマに沿った形で所期目的が達成出来たものと理解しています。また、すべての繊維原料が高騰するなかで、製糸、撚糸、製織、縫製業の高品質なシルク製品の安定的生産、貿易を如何に構築すべきかを日中協働して知恵を出し合ったことは、日中双方が今後のシルク産業において、どのように対処すべきかの道標が示されたものと考えています。

最後に報告内容は、団員の本文を参照頂きたいと思いますが、短期間の訪中にも関わらず、中国紡織品進出口商会、浙江凱喜雅国際股份有限公司&雲南省繭絲綢協会の多くの方々のご協力とご尽力を賜りましたことをここで心からお礼申し上げます。

謝 々
団 長 新美 一夫



(北京：人民大会堂前で)



(杭州：印象西湖 伝統と現代を逢わせた演舞)

一. 団員名簿

訪中国のシルク事情実態調査名簿

日本繊維輸入組合 絹委員会

	氏 名	組合役職	会 社 名	会 社 役 職
団 長	新 美 一 夫 NIIMI KAZUO	委員 長	(株) G S I クレオス	テキスタイル第三部 部 長
団 員	吉 岡 正 博 YOSHIOKA MASAHIRO	副委員 長	北西産業 (株)	代表取締役 社 長
”	鈴 木 誠 SUZUKI MAKOTO	”	西田通商 (株)	第三事業部 次 長
”	渡 邊 大 WATANABE SUYOSHI	委 員	同興商事 (株)	代表取締役 社 長
”	松 村 滋 MATSUMUR ASHIGERU	”	松 村 (株)	代表取締役 社 長
”	潘 林 龍 PAN LIN LONG	”	中 和 (株)	代表取締役 社 長
”	瀧 川 晴 軌 TAKIGAWA HARUKI	委員代理	京都丸紅 (株)	カジュアル着物部 担当 課 長
”	神 保 敬 一 JIMBO KEIICHI	事 務 局	日本繊維輸入組合	業務部 部 長
随 員	佐 藤 宗 一 郎 SATO SOICHIRO		経済産業省 製造産業局 繊維課	行政研修員 (絹織物担当)
”	芝 村 修 SHIBAMURA OSAMU		日本絹人織織物工業組合 連 合 会	常務理事
通 訳	周 萌 ZHOU MENG		浙江凱喜雅國際股份有限 公司(旧浙江省シルク輸出 入公司)	浙江省絲綢紡織分公司 助 理

2011年9月

二. 日程表

日次	月日 (曜)	地名	現地時間	交通機関	行程
1	9月13日 (火)	東京(成田)発	10:35	CA6654 /NH905	
		北京着	13:25		
		大阪(関西)発	10:00	CA6656 /NH159	中国紡織品進出口商会との意見交換 《宿泊:北京新世紀日航飯店》
		北京着	12:15 15:30	専用車	
2	9月14日 (水)	北京発 昆明着	12:00 15:10 16:30	CA4172 専用車	雲南省商務庁市場運行調節処&雲南省 繭絲綢協会との意見交換 《宿泊:昆明佳華広場酒店》
3	9月15日 (木)		08:00	専用車	雲南新千佛繭絲綢有限公司視察と懇 談 《宿泊:杭州維景国際大酒店》
		昆明発 杭州着	16:40 19:10	CZ6248	
4	9月16日 (金)		08:30	専用車	浙江桐郷春雷絲綢織造有限公司の視察 と懇談 浙江徳清華絲紡織有限公司の視察と懇 談 浙江凱喜雅国際股份有限公司との意見 交換 《宿泊:杭州維景国際大酒店》
			11:30		
			15:30		
5	9月17日 (土)	杭州発	10:00	CA1711	
		北京着	11:55		
		北京発	14:20	CA6655 /NH160	
		大阪(関西)着	18:20		
		杭州発	13:40	CA6669 /NH930	
		東京(成田)着	17:50		

三. 訪問先との意見交換

①中国紡織品進出口商会との意見交換

一、日 時：2011年9月13日（火）15：30～18：10

二、場 所：北京 中国紡織品進出口商会 会議室

三、面 談 者：別添

四、議事要旨：

張新民副会長より、日中の原料事情が大変なとき、当商会を訪問頂き感謝と歓迎の挨拶があり、続いて商会の概要と活動の説明（商会の概要は別添）があった。

新美委員長より、中秋の休み明けの忙しい時期に意見交換会を開催して頂き感謝するとの挨拶と今回の訪中の目的についての説明があった。また、東日本大震災、津波そして貴国始め世界を震撼させた原発問題では多大な不安を与え、現在、官民挙げて将来に禍根を残すことのないように取り組んでいるとの説明と過日、貴国の温家宝首相がわが国の被災地を訪問され被災者に対して「笑顔で生きてください」と声を掛けられたと聞いており感謝の気持ちを述べた。

張新民副会長からは、大震災、特に放射能について強い関心を持っているが、日本の国民、特に被災者の皆様には深く同情する。2008年の四川省での地震で同じ苦しみがあり、その時に日本から援助を頂きお互いさまで感謝していると返礼があった。続いて、中国の紡織品・服飾品の輸出入の状況の説明があった。今年1月～8月の貿易額は全体で2.35万億ドル、輸出が1.22万億ドル、輸入が1.13万億ドルであった。また、日中間の貿易額は、2.22億ドルで輸出0.95億ドル、輸入が1.28億ドルであった。絹関係の1～6月全体の貿易は、輸出が17.54億ドル（前年比18.2%増）、対日は1.53億ドル（同25.7%増）であった。輸出相手国としては、日本は4番目で1位がアメリカ、2位がインド、3位がイタリア、5位香港であり、全体の58.9%を占めている。産地としては、浙江、広東、江蘇、上海、四川が主なところだが、全体では84.9%を占めている。なお、繭生産は、広西チワン自治区が最大である。2011年1～6月の品目別では、糸類が8,580トン（前年比4.6%減）、金額では3.7億ドル（同35.2%増）、平均単価43.1ドル/kg。織物類が8,429万メートル（同15.5%減）、金額で3.7億ドル（同21.8%増）、平均単価4.4ドル/メートルになっている。

また、日本向けの品目別は、糸類が902トン（前年比17.3%増）金額では、4,320万ドル、織物類が585万メートル（同4.5%増）、金額では、2,515万ドル（同41.3%増）、製品類が1,013万点（同14.5%減）、金額では、5,164万ドル（同8.6%増）であるが、全体的な今年の生糸の輸出の特徴は、数量は減っているが金額は増えている。逆に製品類は、数量は増えているが、金額は減っている。

楊霞主任から、国営企業で後加工をやっているところは、まだ、技術が遅れており付加価値の高い物づくりをしたいので、中国に技術を持ってきてほしい。各地方の状況を見るとシルク製品については、発展が難しいが、逆に内需は高級品に一定の余地があり、シルク産業は、日中の双方にあるので、協力して新しい取組みができる。日本の中国に対するシルクの投資は、中国の労働賃金の上昇などで難しくなった。また、繭関係は、2011年の春繭の生産量は25.9万トン（前年比5.6%増）で、全体的には品質が良好であったが、江蘇は早魃等により繭が小振りて品質が整わなかった。代表的産地の繭の買い付け価格は、

（担＝50kg）は、・江蘇省 1,800元 ・浙江省 2,244元 ・山東省 2,440元
・広東省 1,900元 ・四川省 1,720元 ・雲南省 1,850元

夏、秋繭の生産見通しは、約38万トン（前年比6.3%増）、2011年の全体生産見通しは約60万トンを見込んでいるが、生産地は、広西チワン族自治区、江蘇省、浙江省、四川省、広東省が主なところである。2010年の繭生産量の減少、他の農産物の価格上昇、製糸コスト増、国内インフレ推移および国際市場の回復から徐々に価格が上がり、2010年3月に乾繭8.5万元/トンが、2011年5月には13.9万元/トンとなった。同様に生糸は40.4万元/トンまで上昇したが、6月以降国際市場の低迷、中小企業の資金調達の逼迫、綿花など原料価格の相対的な下落によって8月には繭9.5万元と31.2%減、生糸31.4万元と23.6%減少した。

中国内のシルクの内需をどのように見るかとの問いに対しては、国内生産統計の角度が高まってきており、貿易統計も海関統計から把握ができるようになったが、内需統計の必要性を感じるが、真綿布団やインナー類のシルク100%の商品と交織があるために分析することが困難であるが商務部と協力して今後検討したい。9月9日に政府が発表した生糸の買い上げ政策の16,000俵の買い上げ価格がどのくらいになるかと問いに対しては、各産地および各企業の思惑があり入札日が近づけば自ずと定まるのではないかと現時点では不明である。



（記念品の贈呈）



（商会との意見交換）

②雲南省繭絲綢協会との意見交換

一、日 時：2011年9月14日（水）16：30～18：30

二、場 所：昆明 商務庁大厦 会議室

三、面 談 者：別添

四、議事要旨：

繭絲綢協会の羅坤秘書長の司会進行により、まず、日中両団長の挨拶があった。徐利根会長より歓迎と今回の訪中の目的等は、北京から聞いているので積極的な意見交換を行いたい。続いて、雲南省は、地理的要素と気候に恵まれていることで、2004年からの「東桑西移」政策により養蚕の奨励を開始した。繭の生産量は全国的にも低いが高品質は高いレベルにある。この地はたばこの葉が一番であるが、次に養蚕で重点産業として位置付けられている。省内の製糸工場で10セット以上の規模を有しているのが14社で、平均8.5セットでそのうち、4社は20セット以上の設備を有し、1社当たりの生糸の年間の生産量は、120～350トン前後の規模である。雲南省は沿岸地域と異なり年4回収繭し、各季節の品質も安定している。格付けは、ほとんどが4A以上で5～6Aも生産できる。生産量5,000トンのうち国内用が20%で、80%がインド向けを中心に輸出用である。

新美委員長より、今回の訪中の目的を説明した後、日本のシルクの需要の大半が和装、きもの関連であるが、なかなか需要を伸ばすことができない。同様に洋装用も生糸価格の上昇により、取扱い業者が苦戦している。日本のシルク製品は、高価格になり市場に受け入れられなくなっている。現在、新しい素材の開発、衣類にとられない製品の物づくりに取り組みをしている。しかし、粗原料の生産は、ほとんどが中国であり、価格、品質の安定が重要であるので、中国の生産量を含め今後価格、品質がどのようになるかについて意見交換をしたい。

その後、双方が積極的な意見の交換を行った。中国側の出席者より、各企業の規模、原料に対する意見が出され、概して、2010年～2011年の繭価が高騰し、生糸価各が40万元前後で推移した。これは相場実態から離れた動きで、不安定の要因としては投機筋の先物取引の介在と真綿布団の需要が伸びたことによって価格がつくられた。今後においても、養蚕農家の実質的な収入を確保しつつ、現状においては、労働賃およびコスト増に見合う雲南省としても30万元/トンは確保したいとのことでした。

雲南省の養蚕業は、政府の奨励によって発展に努めており、過度の価格の乱高下はこれから育成過程にある企業にとって大きなマイナスとなる。どのくらいの生糸価格が妥当化という問いに対しては、工場運営コスト、人件費等が考えた場合には30万元前後であれば採算に合うとの意見であった。また、絹燃糸の生産はどうなっているかの問いに対しては、国内のニット用に生産している。また、一部織物用については、技術が遅れているが、要望があれば浙江省の技術を導入して輸出できる商品の生産は十分可能であるとのことでした。

③浙江凱喜雅國際股份有限公司との意見交換

一、日 時：2011年9月16日（金）15：30～18：00

二、場 所：杭州 凱喜雅大廈 會議室

三、面 談 者：別添

四、議事要旨：

冒頭、凱喜雅集團の創立60周年記念のDVD「凱喜雅絲綢之路」を拝観する。その後、李繼林董事長より、熱烈が歓迎の挨拶があった。2008年3月に完全な民営化になりこの機会に旧浙江省絲綢進出口公司のビルからこの地に移転した。貿易会社の域を超えて国内の生産企業も傘下に加え、原料調達から最終製品までの一貫生産体制を確立して取り組んでいる。中国においてもシルクは伝統的な商品となり取り扱いが難しくなっているが、シルク貿易の会社からスタートした経緯があり、重要な品目として取り扱っている。

新美委員長より、貴社の周萌女史には、我々の受け入れに心良く協力を頂いたことに感謝の気持ちを述べた。まず、個人的に1980年代ころシルクの貿易に携わっており、貴国特に浙江省との取り引きが一番多く、記憶するところ、李繼林氏が輸出部長時代からまた、ハンブルクで再会してシルク貿易に関わった時がありました。そして、本日、20年振りの再会になり大変懐かしく思っていますが、杭州の訪問も21年振りになり、杭州市内のあまりの発展に驚いています。我が国のシルクの需要は年々減少しており、この委員会でシルク需要の掘り起こしのために国内産地との意見交換、新商品の開発に取り組んでいるところです。今回は貴国の原料事情の調査ということで、北京の紡織品進出口商会、雲南省の繭絲綢協会と積極的な意見交換を行ってきました。我が方のメンバーのほとんどが、凱喜雅の皆さんとは顔なじみでありますので、建設的な意見交換を通して、シルク需要のために厳しい意見もよろしくお願ひしたい。

中国側から、最近シルクの国内需要が伸びており、特に寝具類、インテリア類が牽引となって原料価格が高騰したのが一因である。なかでも、真綿布団が一時手加工で整理していたが、新しい機械の開発改良により中綿の抜け、風合いが保たれ品質が上がったことから需要が大きく伸びた。2009年に真綿布団の生産量は、700万枚であったが、2010年には1,000万枚が販売され浙江省内だけで3～400万枚の生産になっている。

生糸価格の高騰は、投機的要因、真綿布団などの内需の増大が要因ですが、浙江省の加工面においては、日本側も解るとおり中国で第一位ですが繭の生産は年々減少しており、製糸工場の倒産も多くなったので、内陸部に養蚕、製糸業が移転せざるを得ない。このためには、現在の開発力、加工力を雲南省、広西チワン族自治区において力を入れているところであり、浙江省としては、貿易を通してブランド力をもって、シルク産業を発展させることが役割になる。養蚕農家からの繭の買い付け価格は、高値で2,475元/担で平均2,000元/担前後で、品質が良ければ高く悪ければ安くなる。仮に1,500元/担では養蚕業の生産意欲が失われることになる。

四. 訪問先工場と懇談

①雲南新千佛繭絲綢有限公司の工場訪問と懇談

一、日 時：2011年9月14日（木）10：30～12：30

二、場 所：陸良村 雲南新千佛繭絲綢有限公司

三、面 談 者：別添

四、要 旨：

収繭所、稚蚕飼育所、製糸工場（自動双糸機5セットX400錐）の各所を見学。王玉興董事長の話によると、養蚕業は、国営企業として40年の歴史をもつが、2009年に浙江省の桐郷からの企業が経営権を持って運営している。2010年に生糸生産量は、350トンで、2011年は400トンを予定し、さらに2012年には、600トンを見込んでいる。現在の桑園は、13.6ムー、生繭の生産が10,000トン、乾繭の生産4,000トン、繭長の平均1,260メートル、従業員は180名前後、平均給与は、1,500元（社会保障類を含めると1,800元）、労働時間は8時間の2交代制、生産生糸の規格は21デニールで、別規格の場合は最低ロット5トンとのことであった。

（寸評）

全般的に良質の生糸を生産しているとのことですが、品質検査は自家検査で、他省に転売する場合には、年2回公的機関の検査を受ける。概して、衛生、工場、商品管理が山東、江蘇、浙江の各省に比較してかなりレベルが低いと感じられた。



（乾燥前の生繭）



（繭の乾燥室）

②浙江桐郷春雷絲綢有限公司の工場訪問と懇談

一、日 時：2011年9月15日（金）10：00～11：30

二、場 所：桐郷市 浙江桐郷春雷絲綢有限公司

三、面 談 者：別添

四、要 旨：

孫如康副総理の話によると、国営の織物工場で1983年に設立、絹織物は、1988年からシャトル織機400台を導入してスターとしたが、1993年にウォータージェットを導入してポリエステルを生産、2002年にイタリア製のレピア織機166台導入し、羽

二重、綾羽二重、クレープデシン、朱子織物を中心に生産し、80万メートル/月、労働者は約500名、平均給与2,700元（社会保障等含む）。2011年は、欧米向けの輸出が不振のために稼働率が2割減となり、また、高値で仕入れた生糸が150トン在庫になっており厳しい経営環境に置かれている。

シルクと合繊を合わせて全生産稼働量は、900万メートルになるが、現在は原料価格の高騰、人件費の上昇、銀行貸し付けの制限、金利の上昇から薄利多売方式から生産品目を変え、品質を重視した経営に努めている。合繊の場合は、今後環境面で発展させることが困難になるので、シルクの付加価値を高めるためには、白生地での商売だけでなく、精練染色を含めての後加工をクリアできれば国内販売に限らず、輸出でも可能性が見出せる。

（寸評）

中堅企業の若いリーダーが、工場経営のために薄利多売方式で合繊の生産を取り入れてやっていたが、中国の著しい環境変化のなかで、今後シルク素材で利益が得られる方策を模索しており、粗原料の適正価格での安定供給が如何に重要かということ感じさせられた。

③浙江徳清華絲紡織有限公司の工場訪問と懇談

一、日 時：2011年9月15日（金）13：30～14：30

二、場 所：徳清市 浙江徳清華絲紡織有限公司

三、面 談 者：別添

四、要 旨：

沈維龍総経理助理の話によると、凱喜雅集團の傘下企業で、2001年に設立で本社は、深圳にある。労働者は、本社と合わせて10,000人で全国の17省から集積している。商品分類によって10工場に別れ、デザインセンターが2箇所（海外デザイナーの常駐、短期も含め20名前後）素材、ニット類の粗原料は、傘下企業から調達し、輸出が80%、国内販売が20%で、輸出の製品類は、EU向けが60%、アメリカ20%、その他が日本、オーストラリアなどに輸出している。OEM生産としては、アルマーニ、エスプリ、コーチなどで、その他80ブランドを持っている。最近では、国内向けに独自のブランドで販売を促進している。扱い素材では、シルクが25%、コットン40%、その他ラミー、ウール、化合繊等が35%である。

労働者の賃金は、8～10時間の1交代制で3,000元（社会保障費含む）、定着率は高く補充の募集も問題ないが、RMBレートが毎年3～5%上がり、賃金も一定の割合でアップしているので、労働コストが全体の利益に大きく影響してくる。このためにこれからは品質、デザインなどトータル面で世界に受け入れられる高級品を手がけている。

（寸評）

浙江凱喜雅集團の巨大な生産基地内ある企業であるにも関わらず、新鋭オートスクリーン、インクジェット機を備え、デザイン、柄出し、配色ともに全てコンピューター処理され、欧米に限らず全世界に発信しオーダーを得る。繊維だけでこれだけの企業になれば、経営が行き詰るところ、さらに躍進する近未来的な企業に感じられた。

五. 訪問先の面談者名簿

・中国纺织品进出口商会

	姓 名	商会职务	部 门
团 长	张 新 民	副会长	中国纺织品进出口商会
	杨 霞	主 任	中国纺织品进出口商会 丝绸部
	傅 浩	副主任	中国纺织品进出口商会 外联部
	郭 莉		中国纺织品进出口商会 丝绸部
	冯 瑞 华		中国纺织品进出口商会 丝绸部

・云南省茧丝绸协会

	姓 名	职 务	部 门
	杨 杰	处 长 副主任	云南省商务厅市场运行调节处 云南省茧丝绸调领导小组办公室
	李 家 顺	科 长	云南省商务厅市场运行调节处 云南省茧丝绸调领导小组办公室
	徐 利 根	会 长 董事長	云南省茧丝绸协会 保山利根丝绸有限公司
	罗 坤	秘书长	云南省茧丝绸协会
	王 玉 兴	董事长	云南新千佛茧丝绸有限公司
	杨 文	副总经理	云南美誉蚕业科技有限公司
	孙 永 美 张 云 吉 长 银 王 银 桥	董 事 长 总 经 理 丝 厂 厂 长 办 公 室 主 任	云南桂浩茧丝绸集团有限公司
	田 富 华		大理州鹤庆县茧丝有限公司

・浙江凱喜雅國際股份有限公司

	姓 名	职 务	部 门
	李 继 林	董事长&总裁	浙江凱喜雅集团
	吕 幸	总 经 理	丝绸纺织分公司
	陈 诚	副 总 经 理	"
	周 萌	助 理	"
	王 伟	秘 书 长	浙江丝绸协会

・浙江桐乡春雷丝绸有限公司

副总经理 孙如康

・浙江德清华丝绸纺织有限公司

总经理助理 沈维龙

六. 訪問先・地域の概要

①中国紡織品進出口商会の概要

中国紡織品進出口商会は、中華人民共和国の商務部（旧対外貿易経済合作部）直属の唯一の紡織品輸出入の管理を行う非営利団体です。1988年10月に「中華人民共和国対外貿易法」に準拠して設立され、紡織品の輸出入業務に携わる各種企業の会員組織によって運営されています。2009年3月現在で会員企業は、11,000社、会員企業の取り扱い貿易金額は全紡織品輸出入金額の約70%以上を占めています。中国紡織品進出口商会の設立主旨は、国家の利益と会員企業の合法的権利を守り、中国の紡織品の輸出入の促進と拡大を図ることで、その職責は、「協調、指導、コンサルタント、サービス」を含みます。主な業務は、以下の通りです。

1. 紡織品輸出入の協調と監督、紡織業貿易の経営秩序と会員企業の利益保護。
2. 政府所管部門の監督への協力と会員企業の法律遵守の指導、不当競争の防止、国際貿易の紛争の仲裁。
3. 政府所管部門から権利を受け、紡織品の輸出割当入札の業務。
4. 政府に対して会員企業の意見を反映させ並びに政府が関連政策を制定するための助言。
5. 会員の国外における紡織品の不当廉売関税（AD）提訴の対応。
6. 国外の紡織品市場に対する調査研究、会員企業のために情報提供。
7. 輸出交易会の組織に参画し、会員の国外展示会への出展、考察、販売促進及び技術交流等の活動を組織。
8. 紡織業を代表して国際同業組織の活動に参加し、関連国際会議への出席、展示会の開催と国外同業者と組織し交流と合作。

《絲綢分会》

絲綢分会は、2001年1月に発足し、現在の分会の会員数は360社で構成している。主な事業は、政府機関と産業界の市場、顧客との調整、不公正な貿易、企業間の紛争を処理し、会員の利益を維持することを目的としている。

理事長 ①中国絲綢進出口総公司 董事長 张伟鸣

副理事长 ②浙江凱喜雅国際股份有限公司 董事長 李繼林

” ③重慶嘉泰絲綢有限公司 董事長 薛建农

理事 ④中国絲綢工業総公司、⑤遼寧成大絲綢進出口有限公司、⑥上海絲綢集团股份有限公司、⑦江蘇蘇豪国際集团股份有限公司、⑧浙江桐郷花神生絲有限公司、⑨安徽省絲綢股份有限公司、⑩江西省絲綢進出口公司、⑪山東省絲綢進出口公司、⑫湖南省絲綢進出口公司、⑬広東省絲綢集团公司、⑭四川省絲綢進出口公司、⑮陝西省絲綢進出口公司

秘書長 杨霞（絲綢部 主任）住所：北京朝阳区潘家园南里12号楼

邮政编码 100021

☎ (010) 67739326 絲綢部

②浙江省のシルク産業の概況

(一) 繭生産

浙江省絲綢協會は、省内30軒近くの買い上げ企業のデータより統計を作成している。その30軒の企業はおよそ浙江省の95%の量を占めている。2010年の蚕種の供給量は108.79万箱で、前年より3.89%減少した。繭の生産量は4.8103万トン(96.21万担)、前年より2.54%増加した。平均買い上げ価格は、1,633.5元/50キロ(担)、前年より532.93元、48.41%上昇した。浙江省の繭生産量は、従来より大幅に縮小しつつあるが、値段はアップする一方だった。2010年になってから、小幅ながら景気が回復したが、全体的にはやはり衰退傾向にあり、浙江省は、全国ベースで第三位の位置から2010年には第五位に後退した。

(二) 工業生産

2010年の全省で500万元以上の売り上げ高を達成した企業のデータ統計によれば、糸の生産量は、14,436万トン、前年より10.2%減少した。織物の生産量は、32,918万メーターで、前年より6.13%増加した。浙江省の繰糸、絹紡糸などの粗加工業は、年々減少し、2010年になって繰糸企業は122軒、実際の生産能力は、半分にも至らなかった。主要原因は、前半期の生糸市場低迷で、生産コストが合わずに倒産企業があった。後半期は、生糸価格が高騰したが、企業は労働力不足で、稼働率が悪かったことが要因であった。絹紡糸工場もシルク需要が縮小したため不況になりつつある。

(三) 輸出貿易

2010年の全国のシルク100%の商品輸出高は、32.58億USドル、前年より12.88%増加した。その中で、浙江省の輸出高は13.17億USドル、前年より9.9%増加した。2005年のピーク時から下がり続けていたが四年ぶりの回復となった。糸類と服装品は、10%前後減少したが、生地、ネクタイ、スカーフ類は、若干増加した。主要商品の輸出量が減しているなかで、原料価格がアップしたことから輸出金額は、若干増加した。

(四) 2011年上半期の基本的な状況

- 1, 春繭の生産状況: 2011年の全国の蚕種の供給量は651万箱、前年同期より7.7%増加。繭生産量は、25.95万トンで、前年同期より4.3%増加。買い付け価格は、2,045元/50キロ、前年同期より34.44%増加。その中、浙江省の蚕種の供給量は、57.87万箱、前年同期より12.3%増加。春繭の生産量は、2.89万トン、前年同期より4.92%増加。買い付け価格は、2,244元/50キロで、前年同期より35.45%増加した。
- 2, 工業生産: 1-7月の浙江省のシルク工業生産は、全般的に見れば安定している。生糸、撚糸などの数量は減少したが、生地と製品類は増加した。昨年同期で欠損を出した企業の繰糸、絹紡糸工場は、今年になって殆どの企業が利益を計上した。逆に、生地工場と縫製工場の利益が下がったが、プリントと染め工場は去年より小幅ながら増加した。

- 3, シルク輸出：全国の2011年上半期のシルク輸出高は、17.54億USドル、前年同期より15.9%増加。浙江省の輸出高は、その中の40%に占めており、各品目毎の数量は減少したが、価格で増加した理由は、単価的にアップしたことが主要と要因と考えられる。
- 4, 2011年上半期のシルクの価格の動向：2008年10月に起こったアメリカの金融危機以来、中国の生糸値段は、当時の17万元/トンから2011年5月に41万元/トンまで上昇した。この2年半の間で殆どは上昇し続けましたが、国内物価上昇、農産物の値上がり、人件費のアップ、シルクの供給と需要の関係によって価格がアップになったことが主要要因と考えられる。しかしながら、2011年5月以降、生糸の価格が大幅に下落し、現在では、31万元/トンぐらいで、ピーク時に比較して25%下がった。これは国のマクロ調整だけでなく、価格高騰によって、シルク商品に対する国内外の消費を抑制させたこと。また、どこまで下がるかを皆が傍観していたのが下落の要因であると考えられる。

二、浙江省シルク産業のこれからの発展方向

(一) 繭生産の安定、合理化改造を実施

浙江省は、自然条件に恵まれ、産地集中、マーケットに対しての対応能力が強く、品質優良というメリットをもっている。より一層の繭の合理化改造をし、繭西移転プロジェクトを促進、基礎設備の建設を強化、生産条件を改善、先進技術を導入して養蚕農民の素質を高める。さらに新しい経営体制を打ち立てて、そこで、産業地域化、規模化、専門化する方向に発展促進する。一方、良質な原料基地の育成、繭の総合生産能力と市場競争力を高めることを目指している。

(二) ブランディング戦略の提出とシルク文化の啓蒙

シルクは、長い歴史をもっており文化が輝かしい。伝統文化を持つシルクは現代ファッション要素を加えさせ、未来の“文化+ブランド”シルク市場の道に頑丈な基礎を打ち立てている。シルク商品がより一層のファッション化するには、国内外の優秀なデザイナーが組む設計チームを編成して、新しい理念を導入し、シルクにこだわるブランドを充実させる。そして、世界中に知名度高めることによって、世界市場の占有率広めることをこれからの課題だと考えられる。

(三) 中堅企業の育成、自主創造力を強化

科学研究所と中堅企業の能力を発揮し、新技術の開発と応用を深めて行くこと。繭遺伝子研究を基礎として、現代バイオテクノロジーを利用し、優良品種を育てること。生態シルクの育成を目指し、高自動化、省エネルギー化、生産清潔化をアップさせ、海外先進的なレベルに達成させること。新柄、品種開発、もっと細かく、もっと功能的、エコと安全性などの面にハイテクを応用させること。シルク繊維の開発は、複合型、多機能の新材料を求め、シルク商品の時代代わりを促進させ、電子縫製、インクジェット、CDA技術などを利用し、ネットワークと先端技術にてマーケットの急速応変システムを完備させることが必要である。

③雲南省の一般的な概況

(1. 位置)

雲南省(省名雲嶺 別名滇)は、約2億年前は海の底にあり、300万年前の大規模な地殻変動によって現在の姿になったと言われ、豊富な自然資源に恵まれ、「植物の王国」、「動物の王国」、「非鉄金属の王国」、「漢方薬材の里」という美名がある。中国の西南端に位置し、ミャンマー、ラオス、ベトナムと国境を、北西部はチベット自治区、北部は四川省、北東部は貴州省、東部は広西チワン族自治区に接している。昆明市、玉溪市を中心とする中部平野では、工業群が集中し市街地は整備され国際都市の呈をなしているが、辺境、高山地帯は焼畑などの原始的な農業を営んでおり、地域差が大きくなっている。主な空港は、昆明、西双版纳(シーサンパンナ)、思茅で、国家級国境税関10ヶ所、省級国境税関が10ヶ所設けられおり、西部からの金沙江(揚子江)、瀾滄江(メコン川)、怒江(サルウィン川)の三大河川が流れ省内を潤している。

(2. 地勢)

北部は標高3~4,000m地帯で、南部は1~2,000mで、一般的には極暑、厳寒期がなく一般的に「亜熱帯湿潤モンスーン気候」といわれている。年間の平均気温が14.5度C前後で、一年中穏やかな高原性の気候に恵まれていることから、植物で15,000種、動物で250種、鳥類で800種ほど生息している。

(3. 民族)

省都は、昆明市(春城とも呼ばれる)であり、面積は日本とほぼ同じで39.4万強平方キロメートル、人口4,570万人強のうち3,000万人が漢民族である。残り1,500万人が彝族(イ族)400万人、白族(ペー族)150万人、哈尼族(ハニ族)120万人、泰族(タイ族)100万人、苗族(ミャオ族)80万人、壮族(チワン族)50万人、蔵族(チベット族)50万人、回族(ホイ族)30万人、傣族(リス族)20万人、景頗族(チンポー族)10万人などの25の少数民族が占めている。

(4. 順位)

漢民族の1,500万人と少数民族1,500万人の併せて3,000万人近くが農村部で生計を営んでいる。中国32の省級行政単位の中で面積が8番目、人口が12番目、GDPは6,168億RMBで24番目、一人当たりのGDPが3,539億RMBで29番目となっている。また、各省、直轄市、自治区の農村地域の居住率で見ると人口の3分の2を占めており29番目の順位である。

(5. 区分)

省都「昆明市」と「玉溪市」のある中部。風花雪月の名勝「大理白族自治州」、高原の水城「麗江市」、神秘の桃源郷「香格里拉(シャングリラ)」の海拔6,740mの「梅林雪山」などの高山地帯の西北部。熱帯雨林地帯の「西双版纳傣族自治州」の南部。火山地帯の「保山市」「臨滄市」などの西部。ベトナムと国境を接する「紅河哈尼族、彝族自治州」、「文山壮族、苗族自治州」などの東南部。雲貴高原のある「昭通市」、「曲靖市」などの東北部の6箇所の地区に区分される。

(6. 歴史)

紀元前700年代の春秋時代は、楚の国が支配し、この地は滇と呼ばれ、魏、蜀、呉の三国時代は、劉備（昭烈帝）、諸葛孔明の蜀の国の支配下になる。その後、唐代では、南詔国、五代十国時代では、大理国と宋時代に雲南行中書省設置、明時代に雲南布政使司が置かれ、1644年の清朝時代に雲南省が制定された。雲南省の民族の生活習慣、顔貌そして食文化としては、もち、納豆、コンニャク、過橋米線（米粉麵）、雲南珈琲、茸、鶏鍋などを食することから日本のルーツを探ることができるといわれている。

(7. 文化)

昆明市は、東南アジアへの交通の玄関口で中国の名高い歴史文化都市であり、元の時代にインドから贈られた仏像が鎮座する大雄宝殿を有する1200年の歴史を持ち螺峰山の麓にある古刹「円通寺」。7年の歳月かけて造られた五百羅漢が置かれている「筇竹寺」。さらには「高原の湖」、「昆明湖」、断崖絶壁に造られた石造建築「西山の龍門」などが名高い名勝地になっている。また、世界遺産に登録されている「麗江古城」、「雲南保護地域の三江併流群」、「中国南方カルスト」のほか、「大理」、「香格里拉」、「石林」、「普洱（プーアル）」が名所として有名である。

(8. 産業、経済)

天然資源では、錫、亜鉛、鉛、カドミウム、インジウム、タリウムの埋蔵量は中国最大で、石炭、銅、亜鉛、金、水銀、銀、アンチモンなど150種類が産出される。特産としては、水資源が豊富なこともあり、たばこ（全国第1位）、天然ゴム（同第2位）プーアル茶、コーヒー豆、マツタケ、サトウキビ、米、花などで、高山地帯では牧畜、養蚕などが特筆される。産業においては、農、畜産業製品の加工と開発、製鉄、非鉄金属工業製品の生産、さらにはインフラ整備、新型建材、ハイテク産業、バイオ資源開発産業など外資を活用して工業化が進められている。2005年に中国・ASEANのFTAが発効されたことにより、経済交流が拡大、また、南アジアとの貿易も活発化されつつある。

(9. 西部大開発)

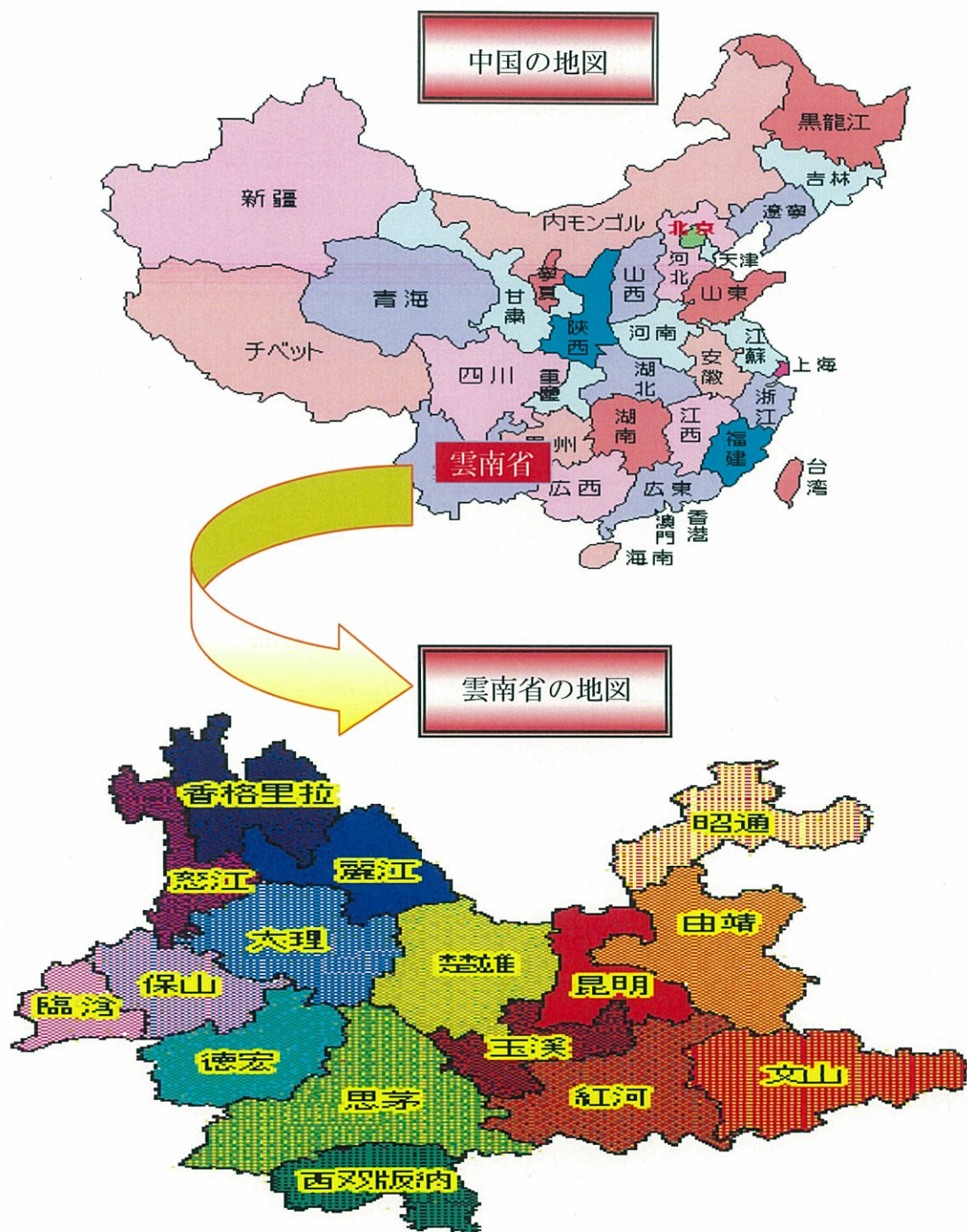
中国政府の「西部大開発」は、2000年の「全人代」で決定された雲南省を始め四川省、貴州省、重慶市、新疆ウイグル自治区、チベット自治区、広西チワン族自治区、青海省、寧夏回族自治区、甘肅省、陝西省、内蒙古自治区の12の省、直轄市、自治区の面積で70%の680万平方キロメートル、人口で30%の4億人を占めるもので、経済の発展を促し所得格差の是正する政策として進められている。一連として「東桑西移」（沿岸地域の養蚕業を中西部地域に開拓する）政策が雲南省に広められた。

(10. 市、自治州)

雲南省の8地級市と8自治州が、12市轄区、9県級市、79県、29自治県を管轄する。

1. 昆明市、2. 曲靖市、3. 玉溪市、4. 保山市
5. 昭通市、6. 麗江市、7. 普洱市、8. 臨滄市

- ①徳宏泰族景頗族自治州、②怒江傈僳族自治州、③甸慶蔵族自治州、④大理白族自治州
- ⑤楚雄彝族自治州、⑥紅河哈尼族自治州、⑦文山壮族苗族自治州、⑧西双版纳泰族自治州



参考文献

ジェトロ、日中経済協会、日本化学繊維協会、大日本蚕糸会のホームページ

「中国 総合版」発行：スワンインターナショナル（株）

「FUJI AIRWAYS GUIDE」発行：フジインコーポレーテッド（株）

七. 市場調査団員の報告

(株) G S I クレオス 新美 一夫

まえがきとは別に個人的な考えを述べさせていただきます。当委員会のテーマであるシルクの需要促進に対して、国内市況の低迷と円高による輸出不振のなか、中国の繭相場高騰の影響で生糸価格は、需要促進には程遠い価格帯になっています。中国内需の増大、人件費、コスト増及び他農作物との価格関係、投機等により生糸の安定価格による継続的な輸入の確保が困難になることが、つい最近まで予想されておりました。

杭州市で訪問した浙江凱喜雅国際股份有限公司（旧浙江省シルク輸出入公司）の話では、中国生糸値段はリーマンショック後の2008年10月の17万元/トンから多少の下げはあったものの、2011年5月の41万元/トンまで上がり続けました。主要原因は、国内物価上昇、農作物の値上がり、人件費増、シルク供給と需要の関係をあげています。しかしながら、2011年5月に入り、生糸値段は大幅に下がり訪問した9月時点では、31万元/トンぐらいでピーク時に比べて約25%下がっていました。特に高い原料を持っている製織工場の話では、2010年度は、かなりの利益が出たが、2011年度は赤字に転落という状況です。

こういった状況下においては、価格高騰によりシルク商品に対する国内外の消費を抑制した反動で、現在はどこまで価格が下がるか皆が傍観している状態であると分析しております。繭・生糸価格下落の中、公司自体も、安定価格・安定供給が必要なことを十分に認識していると感じました。

今回訪問した先で、安定価格と品質・安定供給は重要であることは理解していただいていたのですが、増加している内需がどれぐらいあるかは充分把握ができていない状態であること、及び繭・生糸価格の下落が大きい場合は、今後の生産量に及ぼす影響大であると思いました。日本サイドは、今後中国から安定価格・品質の物が供給できるようになっても、シルクを使用した複合素材や機能素材の開発に力を入れ、国内外の消費者に受け入れられるようにしていくのと同時に、衣類以外の用途にもシルクが使われるよう進めていかないと、需要促進にはならないことを再認識しました。当委員会としてシルクの需要促進に少しでも貢献できるよう活動していきたいと思っております。

最後になりますが、4泊5日で3地域を回る過密スケジュールの中、皆さんの協力により、有意義な意見交換と工場視察ができたと思っております。杖を持つての移動でしたが、皆さんに親切にして頂き、大変感謝しております。

北西産業（株）吉岡正博

中国紡織品進出口商会

張新民副会長より、日本繊維輸入組合と7年間に渡り交流を続けてきた事は、非常に重要で今後も続けていく。今後も定期的に交流し、シルク関係について、何か相談したい事あれば、いつでも協議すると述べられた。定期的に交流する事は大事な事ですとの言葉に非常に感銘を受けた。今年の春繭について次の通り。2011年春繭の生産量は25.9万トン（生繭）、2010年と比較し5.56%増量。品質は良好。全国平均の買付価格は2,045元/50キロ。夏、秋繭の生産見通しは38万トン、2010年と比較し6.3%増量。2011年繭生産量の予想は約60万トン。

雲南省

繭生産に適した地方で、現在、製糸工場は14社、製糸機は120セット、5.6万錠と説明を受けたが、各製糸の発言を聞くとそれ以上の製糸機台数となる。もとは重要産業として葉タバコの生産があり、近年になり養蚕が盛んになる。一年を通じ、気候に恵まれ、繭の解除率は70%と良く、糸歩も40%前後と、各製糸は自信を持って生産している。生糸の生産量は5,000MT未滿。昨年6月頃より、仕手の買上で繭と生糸が高騰し、高値が約1年間続き、又、国内における労働賃金も20%上がり、各製糸工場も困難をきたす。ようやく今年7月より値下げに転じ、繭も30万元/MTまで下がり、中国繭絲綢弁公室は9月9日付けで、生糸の買上公告を全国に通知した。雲南省としては、繭の価格が30万元/MT中心になれば、農民と製糸工場にとって良い値頃である。雲南省の生糸は、3A/4Aを中心に、国内販売と第三国を經由してインド向けに輸出している。

浙江凱喜雅集團

年商9億ドル浙江省の繰糸、絹紡糸などの粗加工業は減少。昨年来の生糸の暴騰により繭の増産が年間約65万トンになる可能性がある。価格高騰がシルク商品に対する国内外の消費を抑制させた。どこかで暴落するかと皆が傍観している中で、9月9日付けで中国繭絲綢弁公室が生糸の買上公告を発表した。シルク市場の生糸価格を安定させる為、良いタイミングであった。シルク製品の消費傾向については、寝具、インテリア等の需要について取り組んでいる。特に従来の真綿布団については、機械化が進み、700万枚から、今年は1,000万枚を生産する。

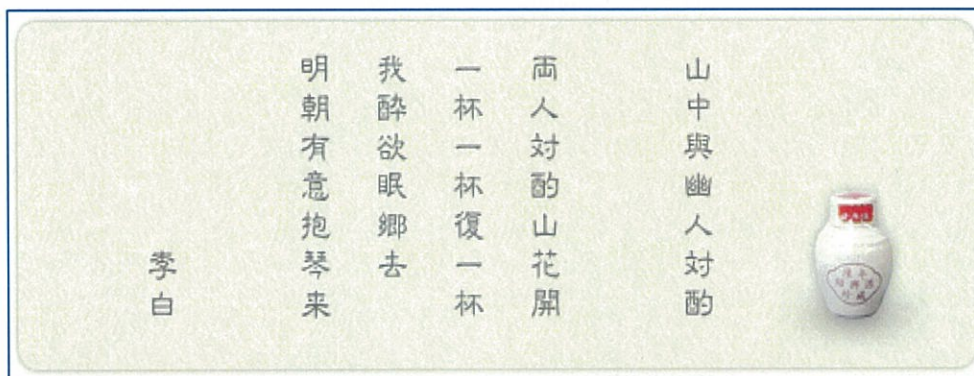
最後に北京では、中国紡織品進出口商会の張新民副会長及び職員の皆様の温かいもて成しを受け、雲南省昆明では、各製糸の生糸生産意欲が高く、元気な皆様に感心し、浙江省では、浙江凱喜雅集團の皆様が生糸の暴騰暴落の一年間を冷静に判断し、良い成績を残している事を嬉しく感じました。

西田通商（株）鈴木 誠

生地手当て、そして製品の扱いを主に永年取り組んできたが、最近、こちらが求める生地が上がってこなくなった。原料からの見直しをして取り組む必要があると感じていたが、なかなか中国の原料事情に触れる機会がありませんでした。中国には月1回のペースで行きますが、北京には仕事で行く機会がほとんどなく、何をしに行くのかと思っていました。北京の商会は、輸入組合と関係があり商務部との協力機関ということで、意見交換の場でも日本のシルク現状を理解されており、相互協力したいという誠意が伝わってきた。ただ、意見交換後の宴会が北京料理ではなく、広西自治区の料理での歓迎会であったことには驚きました。

翌日、北京から空路3時間以上飛んで着いた昆明空港は、市内地にあり、ホテルまで20分ほどで到着しました。絲綢協会との意見交換の場は、ホテルから歩いて10分ほどの商務庁のビルでした。会場の部屋に入ると、中国側からたばこを日本側の全員に放り投げられました。聞けば、雲南省は中国1のたばこの産地とのことです。これが中国かと思われるほど各団長構わず10数名の参加者が会社自慢、日本側はどのような糸がほしいのかと売り込みです。商務庁の役人も同席していたが、ほとんど傍観しているようで、絲綢協会には圧倒されっぱなしでした。話し合いの続きは場所を変えてということで、昆明で一番の老舗、昆明料理を30名の円卓で振舞われました。皆がたきつけるので、中国側出席者の全員とは初めて会ったのですが、最初から最後まで白いお酒で乾杯したら、最後には老朋友になっていました。次の日に3時間かけ陸良という田舎の養蚕地帯に行きましたが、さすがにバスの中では頭が重く横になっていたが、治りません。聞くと、昆明は海拔1,900メートル、陸良は2,200メートルにあるので、高山病の一種だといわれて納得でした。

続いて、昆明から約2時間の空路で杭州に着きましたが、日本に戻ったかのような安堵感があった。次の日は桐郷の機屋、徳清の縫製企業を視察したが、ほとんどが日本に目が向いていないという感じでした。浙江凱喜雅国際股份有限公司との意見交換は、旧浙江省のシルク輸出入公司ということで団員のほとんどが老朋友でした。新美さんが、李継林総裁とは20年振りの再会ということにはびっくりしました。最後の夜の歓迎会は、外国人にはあまり出さない杭州の地元料理で、紹興酒での乾杯の連続でした。



同興商事（株）渡邊 大

シルク糸値の値上がりについては、さまざまな要素があるが、やはり投機的先物取引、シルク布団の国内需要が増加したことが大きな要因であり、労働コストにおいては、東部、西部とも大きな開きはないため養蚕農家の積極性を欠かさない範囲と需要とのバランスを考えると、30万円/トンくらいが現状での適正価格ではないかと考えられる。

特に雲南省の繭は、確かに良質であるようだが、工場環境、管理などの様子から見ると安定的な品質かどうか疑問を感じた。また、ここ5年間の繭の総生産量は、東桑西移の政策により、沿海地区は減産しているが広西壮族自治区、雲南省などを中心に増産となっており、量は増えたが品質は下がっていると言われる。

現在、従来のシルクの織物産地の各機屋では高速織機を導入し合織織物に生産を切り替えてきているようだが経営的にみるとシルクと合織ではリスク負担が違う。ポリエステルは、シルクのように原料価格が乱高下することもない。例えば、シルク原料35元/100gに対しポリエステル2元/100gといった差がある。そもそも、シルクの機屋の利益率は、3～5%程度なので原料価格の変動はすぐに影響を受けるとのことであるが、現在、ポリエステルは環境に良くなく、シルクは究極のエコロジーといえるものなので、後加工を安定すること、交織などでシルクの弱点を補うことが、シルクの需要促進に重要なのではないかと感じた。今後も日本国内のシルク需要の安定的拡大を期待する上でも、中国の原料事情が安定することが絶対条件である。2009年～2011年のような継続的な値上がりは異常であった。さまざまな要素はあるが、繭から製品までの生産に従事する者が潤わずに投機的目的でシルク原料が博打的取引により乱高下し、築いてきた商品価値が変動してしまうことでは本来の需要の掘り起こしはむずかしいと感じた。

中国が、世界最大のシルク生産国である責任の上でさらに原料価格安定体制を築いていくよう期待したい。また、2009年の訪問時よりシルク布団の販売が増加し始め、訪問先のどこへ行ってもシルク布団の話が聞いたが、今回の訪問でさらにシルク布団の販売が伸びている事に驚いた。すぐにでも、中国でのシルク布団の市場だけで日本の和装市場規模を超えていくような成長であり、このように中国国内のシルク需要、市場が育成されていくことも日本、世界のシルク市場の安定につながっていくのではないかと思われた。



松村（株） 松村 滋

今回の実態調査は、前回の2009年10月に実施されました陝西省、広西チワン族自治区に続いて2年振りの調査でした。2008年のリーマンショック後の12月に最安値16万元/t（一般銘柄）をつけた生糸価格は、2011年6月の春繭の収穫時の41万元/t（一般銘柄）まで2年半にわたり、約250%の上昇相場を形成しました。しかし、7月より一転して下落に転じ、10月の秋繭の収穫を控えての微妙な時期の訪中となりました。

出発直前の9月9日、中国政府は、突然16,800俵の生糸の買い入れを発表した為、各訪問先の意見交換では政府の買い上げ価格が常に話題になりました。「現状の中国経済の背景の中で妥当な繭価・生糸価格（再生産可能価格・下限価格）は、どの水準か？」との質問には、ほとんど誰もが30万元/tの価格を提示したことは印象的でした。帰国後の9月27日には政府が、16,200俵を328,424元/tで買い上げるとの発表を行いました。上記の30万元/tの水準を考えますと秋繭の収穫価格を意識した政府決定か価格になったと推測されます。

中国は世界最大の生糸生産国であるとともに、最大の消費国（純内需）になったとの認識が高まっており、各訪問先において、中国の内需に関する質問を致しました。しかし、繭・生糸の生産や絹織物・製品輸出の統計資料はある程度整っているものの、近年まで輸出中心の産業であった為に、内需の把握についての重要性は意識されておらず、我々の「世界最大の生産国であり、また、最大の消費国となった中国が、自国の内需状況を正確に把握できていないということは、世界の生糸価格の安定に対して責任が果たせないのではないのでしょうか？」との意見に対して真摯に耳を傾け、日本繊維輸入組合からの要請として、上部機関に伝えるとの約束を頂くこととなりました。

前回の広西チワン族自治区への訪問では、政府の「東桑西移」政策のもと、年間9～10回の収穫が可能な気象条件に恵まれて、さらなる増産の可能性に目を見張りましたが、今回の雲南省への訪問では、年間収穫回数こそ従来の沿岸地域の条件とほぼ同じ、4月～10月までの年4回ではありますが、昆明の高原性気候が養蚕に非常に適していることを実感致しました。

また、蚕種の研究が、早くから進んでいたことにより、この地域に適した蚕種の投入が成されているのだろうと推測されます。繭の糸長1,100m・糸歩40%と共に、解舒率70%以上は近年進みつつある山東省、江蘇省、浙江省の優良製糸工場の生産縮小、廃業に対して救世主になる期待を抱かせる訪問となりました。

中和（株） 潘林龍

今年行われた二年に一度の絹委員会を訪中は、今までと違って、北京のシルク行政管理を始めとして、内陸の雲南省昆明を通り、最後は沿海部の杭州まで、幅広く様々な角度から今の中国の実態を視察いたしました。大変参考になりました。輸入組合に心からご感謝を申し上げます。

全世界のシルク生産の80%以上を持っている中国が、政策面でも、企業の経営者の立場からでも、今何を考えているか？今回の訪問によって、立体的に理解を得たと思います。その一つとして、まず、内陸部と沿海部との差です。即ち原料重点の内陸部とシルク商品開発を進めている沿岸部との違いです。桑園の面積、農家の収入、そして、生産の意欲を持つ雲南省と真綿布団の内需を拡大したい浙江省、シルク産業の維持に対しての意気込みが、とても印象的でした。

次に、中国もシルク産業の転換期に入っていると思いました。人件費の問題、労働者の後継問題、産業経営自身の利益が薄い問題、これらの問題を含め、中国のシルク産業が今後どのように発展するか、非常に注目すべきだと感じました。シルク原料相場の安定性については、その重要性がますます日中共通の目標になるかと思っています。そして、技術と商品の開発、また、シルクの商品販売手法などが殆ど見えない中国においては、シルク文化の進化と消費者への工夫が今後大きな課題になると痛感致しました。



(浙江徳清華絲紡織有限公司)

上：縫製工場 下：サンプル室での懇談



(浙江桐乡春雷絲綢有限公司)

製織工場

今回の中国訪問は、弊社の一社員として参加、同行させて頂きました。そして、現状の中国シルク原料事情の実態を少しでも把握し、今後の和装業界に役立てればという思いで臨みました。最重要項目としまして

- ① 東桑西移政策による繭生産拠点の移行の確認
- ② 生糸価格の高騰事由の確認及び今後の動向把握の情報収集に努めました。

特に②につきましては、和装業界各流通段階に深刻な状況を生じさせています。

2010年1月3A格20万元/t⇒2011年5月3A格40万元/tと一度も下がること無く高騰したことで、各段階での販売価格が採算割れで流通しており、収益悪化を招いている現状です。国内織物産地も3,000円/kg⇒5,500円/kgと原料は倍額になっていますが、製品にはすべて転嫁できていない現状を踏まえると、世界のシルク生産シェア75%の中国シルクの価格安定が不可欠であると思いました。

今回、北京・昆明・杭州のシルクに携わる方々との意見交換において、各関係者共通で強調された点ですが、

- ・生糸価格の安定が日中双方の共通認識であったこと
- ・繭品質の向上に注力
- ・労働者確保・生産維持の為、生糸価格（30万元/tで安定）安定要望
- ・真綿布団・インテリアの国内消費拡大（中国シルク生産40%）
- ・雲南省（内陸部）の労働者平均月給与2万円

日本では取り寄せられないさまざまな情報を得ることができたことは収穫でした。絹織物自由化以来の訪中となりましたが、中国経済の成長、発展には驚きを感じ、今後は、単に原料の供給国ではなく、日中協力して取り組んでいく方向性を明確にし、日中のシルク産業が互いに発展していく道をたどっていくよう提携していくことが最優先課題と思いました。

最後に今回の訪中でお世話になりました皆様方本当に有難うございました。会社での営業を離れて、海外への出張ができたことは、大変良い経験を得ましたので、次回、この委員会で海外出張が企画されるようであれば、是非、参加したいのでよろしくお願いします。



(陸良村：集繭・買付所)



(陸良村：養蚕農家前の通り)

個人的にも初めての訪中ということで大変興味深く、また、北京、雲南省、浙江省と地理・気候的に異なる三か所を飛行機により移動することで、様々な中国を垣間見ることができ貴重な経験となった。とりわけ印象に残ったのは経済発展の状況である。高速道路、幹線道路といった道路網だけでなく高速鉄道、地下鉄や空港を含めた交通インフラの巨大さや整備の進捗状況は圧巻の一言であった。他にも、都市を走る多数の高級外車や空港のラウンジでスマートフォンを触っているビジネスマンや若者の姿からは、多数の富裕層や日本と同様IT化された生活様式を送っている層がいることを感じた。

繊維産業全体で考えると、2010年の実績では衣類で見た場合、輸入浸透率は95%にもなり、輸入のうち中国が占める割合は88.9%になる。日本の衣料品は多くを中国での縫製に依存しており、今回訪問した製織工場、縫製工場は日本向けをメインにしている工場ではなかったが、世界の工場と言われる中国の一端を見ることができた。一方で、前述の富裕層の増加や生活様式の変化、賃金の上昇の話などからは、中国がシルク市場としてアパレルに限らず、寝具、インテリア市場としても有望であることを感じた。とはいえ訪問先の工場では従来のヨーロッパ向けだけでなく中国内需にも力を入れているとの話もあり、各国企業との競争の中で中国国内に日本企業が進出するには、独自の付加価値がある製品づくりが不可欠であることを感じた。

担当の絹業について述べると、原料である繭の国内生産は減少しており、国内のきものの需要をすべて満たすことは難しいのが現状である。シルクの新たな需要掘り起こしというテーマからは外れるが、日本の伝統文化であるきものの原料を輸入に頼らざるを得ない現実と、その原料の輸入すら困難になる懸念があることを改めて考えさせられた。そこで重要なのはやはり国内におけるきものの振興、中国の需給等の状況把握であると実感した。

最後になりましたが、日本繊維輸入組合絹委員会のシルク原料実態調査に同行させていただき厚くお礼申し上げます。



(収繭所の見学)



(製織工場での記念撮影)

今回、輸入組合の「中国シルク原料事情の実態調査」に随行させていただきました。新美委員長はじめ団員の方々のご配慮に感謝申し上げます。

絹織物産地は、原料生糸コストの上昇により見通しの立たない不安から危機感が高まっている時期での中国シルク原料事情実態調査となりました。幸にも、訪中直前には、生糸相場は一転して下落に転じました。中国で何が起きているのか、この目でつぶさに見てこようと意気込んだものの実際前回2003年10月に経済産業省の委託事業として「絹糸における生糸代替可能性海外調査で輸入組合の協力頂いて訪中したときと比べて、都市部の発展ぶりに圧倒されました。聞くところではオリンピックを境に大きく都市化が進んだとのこと。中国政府はこの発展のうねりをいつスローダウンさせるのか、いや、この勢いは止められないのか、この開発・発展は更なる地方との格差問題を引き起こすのか、走りながら障害を克服するため試行錯誤を繰り返す中国の姿を垣間見たような気がしました。

今回のシルク調査においても政府の東桑西移の政策による大きな流れの中、現実的には民営化のもと、地方においては中央の考え方と必ずしも一致したものではないようです。日本の尺度では測れない部分があり、一方で環境の変化に対応できる力強さ（商売強さ）を感じました。50を超える民族の集まりの中で様々な考え方や行動があり、一元的に将来を見通すことのむずかしさを痛感しました。

中国は今、農業保護政策により、安定農産物としての繭作りを推進、中央と地方との格差を是正するために、地方の安定収入源とし確固たる地位を築こうとしています。一方で世界的不況の中において、そのシルクの供給先を従来海外に求めていましたが、今後巨大市場としての可能性を秘めた内需（富裕層）へ目を向ける為の方向転換を迫られています。（シルク布団の販売強化）。高付加価値のシルク製品の開発は内需の拡大により達成できるとみており、将来的にはブランディングにより高品質シルク製品の海外進出を果たす狙いがあります。赤字部分の補てんをいかにするか、シルク製品の製造から販売までの一貫体制が求められています。更に、生糸価格の高騰が続くと消費者の購買意欲が無くなりシルク需要を減退させるばかりか繭の粗悪品が出回り生糸の品質を悪化させる要因となっています。

いずれにいたしましても生糸の世界的な供給源である中国に対しては、節度ある（世界需給バランスにおける生産体制の構築）安定供給を望むこととなりますが、雲南省では平均的生糸の売渡価格は30万/トン（1元12円として3,600円/キロ）ならば養蚕・製糸・織物の安定操業ができると見ています。しかし、近年シルクに近い風合いを持つ合織が台頭しており、寝具、インテリア類以外のシルク内需拡大につながるか中国も正念場を迎えているように感じました。

日本纖維輸入組合の絹委員会とお付き合いは8年目、訪中団と随行するのは3回目です。けど、同業者としてお供させて頂くのは初めてでした。浙江 CATHAYA に入って一年ほどの私は初めて会社の立場で懇談会に参加したり、工場見学をしたり、そして、工場担当者達と交流をしました。中国紡織品進出口商会との触れ合いも初めてで、雲南省繭基地の調査も初めてだったし、たくさんの初めての体験なので、この調査はとても有意義な初体験だと思っています。

昨年、輸入組合が訪中を企画していると聞いて、輸入組合から繊維の女王であるシルクが日中双方にとって危機的な状態にあるので、現状を知った上で今後のあり方を皆で考えようと連絡を頂きました。そして、私に日中の懸け橋になってほしいと言われました。こんな新入社員に何を言っているのでしょうかと思いましたが、考えれば2003年の旅行会社の新入社員だったときから、芝村さんや神保さんとは知り合いです。そこで、輸入組合が中国といっしょに考えようということは、大変なことだなと上司に話したら、出来るだけ協力するようにと言われました。

ところが、3月11日の大震災で東日本地方のシルク産地に多大な影響を与えたことで訪中をあきらめかけていましたが、延期すればどうでしょうか。と伝えましたところ、9月に実施したいと言われました。でも、当初聞いていた四川省、雲南省から北京、昆明に変更されていましたが、最後に杭州に立ち寄る計画に変わっていました。とても嬉しかったです。でも、国内航空券は、早めに予約すれば4割引きが取ることができましたが、7月の新幹線の事故以来、航空券の取得が大変になったし、既に発券したのも臨時キャンセルされたことが何度もありました。また、ホテルも過当競争から簡単にディスカウントができなくなりました。それは、税務処とホットラインで繋がるようになったので、会計面で厳しく、特に領収書が統一されたからです。本当にいろいろな事情が案外に起こりました。けど、一々臨機応変に取り扱ったら結局なんとか解決できました。

今回の調査で一番印象深く、そして、一番メインの所は雲南省の昆明でした。雲南シルク繭協会の協力で、現地の製糸工場の責任者をおよそ10社も集めてもらって、日本側のメンバーとフェース・ツー・フェースで懇談できたことは大変ありがたかったと思っています。その中、代表としての新千佛繭絲綢有限公司のアレンジで、桑畑、養蚕農家、繭買い付け場所と製糸工場を皆さんに見て頂いて、私自身も昆明繭基地の発展の潜在力を実感しました。原料に対する知識は専門家の方々に熱心に教わりました。一令の蟻蚕から一ヶ月かけて五令の大人になり、頭上げて糸引くことから、シルクの生き生きとした天然の高級さを理解できるようになりました。こんなプロセスを心掛ける、だからこそ、その生命力は、正にシルク自体の光沢のように輝いているのでしょう。

昆明の工場で見本を取った方もいらっしゃいましたので、私は現在アパレルを担当していますが、昆明との取引を考えられている方は、私を仲介して頂ければ地元と連絡役をいたします。それには、私は何点かの感想があります。皆さんと分かち合いたいと思います。

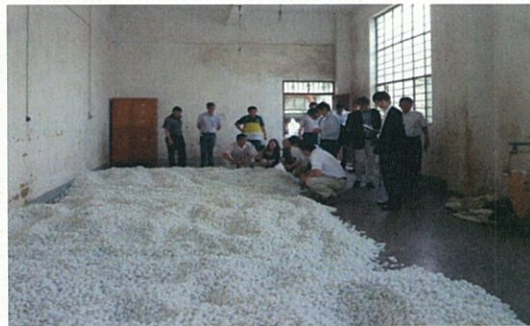
1. 昆明の繭生産は、国の“東桑西移”と“西部大開発”の政策に支えられ、立地条件に恵まれて、とても相応しい所と思います。
2. 人件費が上昇しつつある沿岸部に比べたら昆明の方が割安で、シルク需要振興には役に立つと思います。
3. 繭生産はスタートしたばかりなので、養蚕農民と工場労働者のトレーニングと品質管理を強化しなければならないでしょう。いままで殆ど国内販売ですので、国際取引の経験に欠けています。懇談会で、輸出の際の国家検査はどうするのかと聞いた時、浙江省に頼みますと答えられていました。けど、よく考えてみたら、それも国内販売の考え方です。例えば、浙江省の工場が買い付けするなら実物が浙江省に運ばれて浙江省に頼むけれど、港口から出荷するならば遠廻りして浙江省で国家検査をされると考えたらちょっと現実的じゃないでしょう。ですので、輸出拡大の場合には、暫く貿易会社と雲南省シルク繭協会の力を借りることが一番良い方法だと思います。

原料以外に、アパレルの面から見れば、シルク需要を掘り起こすことは決して簡単ではないと思っています。中国の輸出の現状は、宴会着とパジャマのオーダーは小ロットのシルク製品がありますが、圧倒的な量産のカジュアル、特に欧米向けの場合はレーヨン・スパンデックス、ポリ、モダールが殆どだと思っています。ですので、心からシルクの需要を呼びかけることは難しいので、皆さんの大変な所をよく理解しております。

日本の苦しい事情を訴える内容のお手紙も頂きましたが、実際皆さんにお会いして、シルク100%でもなく、シルクの良さ残して商品開発のために知恵を出し合いましょうと言われたことに私がCATHAYAに入ったのも、仕事だけでなくシルクを通して人とのつながりが大事だなと感じました。今回は最後の日にちょっと大変なことがありましたが、日中の懸け橋の人材になるという重さを感じつつ、とにかく学ぶことに努めようと思っています。



(蚕 2令)



(集繭所の見学)

あとがき

当委員会のシルク需要掘り起こし事業の一環として国内外の関係企業、団体との協働を図る目的で、2011年度事業「中国のシルク原料実態調査」実施しました。商務部の認可団体である中国紡織品進出口商会との意見交換は、大変有意義でした。農林部所管の繭と商務部所管の生糸以降の商品の取扱いで中央の政策と地方の生産、貿易企業との考え方のズレが感じられ、特に雲南省では、商務庁（商務部支局・事務所）が主導して省内の有力な繭絲綢協会の会員を昆明に集めて頂いたと聞いていたが、民族企業と他省の資本協力企業との繭、生糸生産に対する考え方、特に品質に対しての違いが感じられました。

浙江省の凱喜雅集団は世界戦略企業で、グループの一員の浙江凱喜雅国際股份有限公司（旧浙江省シルク輸出入公司）は、扱い品目が原料から製品まで生産、貿易とも傘下企業で賄い、シルク関連では中国の唯一優良企業に位置付けられていますが、ここ1、2年原料価格高騰による国内市場への影響を考え、寝具、インテリア等の需要増進に力を入れて取り組んでいることを力説されていました。世界の化合織原料を含めて、全生産量の0.2%しか生産されていない生糸で、世界の生産量の75%を占める中国の桁の大きさに改めて驚愕させられました。

今回、商会の骨折りを頂き、雲南省を訪問することができましたが、養蚕地帯の地方に行ったとき、まわりの風景、農家の住居も東アジアの雰囲気があり、路の両脇には、石林を思わせる石類が自然に溶け込んで、背の高いタバコの木、そして、背の低い桑の木が整然と並んでいました。食は雲南省にありと言われるように、豆類の豆腐、納豆、煮豆等は、日本で食するものと同じ舌触りで、いろんな料理で香辛料を使ったもの以外は大変食べ易く馴染みがあるものでした。北京では広西チワン族自治区の家庭料理、雲南省では地元の料理、杭州では杭州風台湾料理、桐郷、徳清では地元の家庭料理等で、現在の中国では、老朋友に日本でも寿し、てんぷら、しゃぶしゃぶ等でもてなすように、ほんとうの中華料理とは、普段中国人が食する料理とのことで、これでもてなすことが、礼儀になったとのことでした。

今回の訪中は、中国紡織品進出口商会の楊霞さんおよび浙江凱喜雅国際股份有限公司の呂幸さん&周萌さんに全面的に受け入れについてお願いし、意見交換の訪問先、工場さらには中国内飛行機、ホテル等の手配等、そして、通訳まで協力頂き、中国人のシルク、日本人に対する思いを短期間の訪中でしたが、数多く知らされました。

今度、機会があったなら、日中シルク貿易でお世話になった方々を当絹委員会でご日本にお迎えしたいと思いました。

（事務局 神保）